

古儀式派ロシア人のユートピア伝説

中 村 喜 和

1. 古儀式派の成立
2. 古儀式派に対する迫害
3. 白水境伝説の成立
4. 日本を訪ねた人々

1 古儀式派の成立

一七世紀の半ば、ロシア正教会の内部で分裂騒動が生じた。それはロシア史上「謀反の時代」と呼ばれているこの世紀の中でも最も大きな事件の一つであったし、その結果が現代にまで影響しているという点でも、他に例を見ないほど深刻な出来事であった。

問題は一六五二年にロシア正教会の総主教に就任したニコンが教会における儀礼改革に着手したことから生じた。印刷技術の進歩によってロシア全土の各地で教会関係の書物が用いられるようになったが、祈祷書の本文や教会儀礼に不一致が見られるようになった。一七世紀初頭に約十年間つづいた動乱の後にロマノフ王朝が成立したが、ロシアの領域が広がる中で、そのような不統一が存在することは好ましい事ではなかった。ニコンは総主教の位につくと、まず祈祷書の改訂に着手する。各地で筆写が繰り返された結果、国内各地の正教会で使用される祈祷書に少なからぬ異同が生まれていた。ニコンは素性のあやしいギリシャ人アルセニオスを重用し、当時ヴェネツィアで刊行されていたギリシャ語テキストに依拠する方針を取った。その結果は正教会内部の人々を満足させるものではなかった。

一六五三年の初め、復活祭に先立つ大齋期の直前に、ニコンは従来の儀礼の変更を命ずる通達を主だった聖職者に送った。その内容は以下のようなものだった。

- ・教会の聖堂内での礼拝は床にひざまずく礼拝（跪拝）は行なわぬこと。腰のあたりまで頭を下げれば十分である。
- ・十字を切るときは二本の指ではなく、三本の指を用いること。
- ・「イエス」を文字で表記するとき、iの文字を二つ重ねること。
- ・ミサの後で聖堂の周囲をまわるとき、入り口から南に回らぬこと。（時計まわりの禁止）

- ・聖歌の「ハレルヤ」を二度ではなく、三度唱えること。
- ・聖体拝受のさい、聖餅を七個ではなく五個に切り分けること。
- ・イコンの描き方はビザンツ流ではなく、イタリア式の新しい様式を認める。
- ・聖歌は斉唱ではなく、五線譜にもとづく多声のものにする。

ニコンの改革はおおむね同時代のギリシャ正教会の慣行を模範としていた。十世紀の末東ローマ帝国からキリストを受容して以来、コンスタンチノーブルは何かにつけてロシア正教の精神的な先達となっていたのである。

ニコンが突如として独断的に求めてきた改革に対して反対する側にも言い分があった。たとえば十字の切り方に対しては一五五一年にモスクワで開かれた教会会議においては次のように定められていた。「人差し指と中指を合わせ伸ばして広げ、少し曲げたままで十字を切ること」。このような切り方には意味があった。百章第三十一章においては「二本の指のうち、高い方はキリストの神性を、低い方は人性を表している。指を曲げることについては「主が我らを救うために天を傾けた、と解釈される」（中村、1993、33頁）という神学的な注釈までつけられていたのである。

改革は概して革新的なものであった。しかし反対者の立場から見れば、それは正しい信仰からの逸脱と思われた。改革は儀礼の形式に関するものであったが、古式を尊重する者にとっては、信仰の本質にかかわる由々しい問題と考えられたのだ。

最初から改革に異議を唱える者は少なくなかった。ツァーリの政府とニコンの率いる正教会当局は反対派を力づくで押さえつけようとした。反対派の旗頭と見られたアヴァクームは赤の広場に立つカザン教会の長司祭だったが、モスクワ市内の修道院の牢に押し込まれても、頑なに信念を変えなかった。やがて彼は家族ともどもシベリアに流刑となった。その他にも職を取り上げられたり、モスクワから追われたりした僧侶が数多くいた。むろんニコンの改革は俗人の信徒のあいだでもすんなりと受け入れられたわけではなかった。

権勢欲の強いニコンはまもなく皇帝アレクセイの寵を失って失脚するが、彼の始めた典礼改革は取り消されない。一六六六年から一六六七年にかけて、アンチオキアとアレクサンドリアの総主教を招いてモスクワで開かれた宗教会議でニコンの行なった改革は再確認され、これに反対する者は異端と宣告された。こうして典礼の変更を承認しないグループは分離派（ラスコーリニキ）と呼ばれるようになる。

分離派は権力の側からの呼称である。彼らとしては自分こそ真のキリスト教徒と考え、国教派をニコン派と呼んで卑しめた。中立的な立場からはニコンの改革を受け入れずに古い典礼に固執した人々を古儀式派あるいは旧教徒と呼んでいる。（英語で表記するときには伝統的に Old Believers である。）

2. 古儀式派に対する迫害

一六六六年～六七七年の宗教会議ののち極北の地プストジョールスクの土牢に閉じ込められたアヴァクームと三人の同志は、一六八二年に火あぶりの刑に処せられた。

アヴァクームにしたがって伝統的な信仰を守ろうとした者の中にはフェオドーシア・モローゾフ夫人のような身分の高い人々もいた。夫人の夫は宮廷に仕える大貴族で、夫の兄はアレクセイ帝の寵臣だった。フェオドーシア自身も帝妃と血つづきの関係にあった。モローゾフ家の所有する農奴は1万戸を上回っていた。フェオドーシアは若くして寡婦となるが、アヴァクームに心服していた。彼がプストジョールスクに流された後も、秘密の文通を続けていた。彼女は皇帝直々の説得にも耳をかさず、一六七三年には逮捕される。(彼女が荷車で連行される情景が画家のスリコフによって描かれて有名になる。) フェオドーシアが同じ信仰をもつ妹のエヴドーキアとともにモスクワ近郊のボロフスクの尼僧院に監禁され、まもなく二人とも土牢の中で飢え死にさせられた。

旧教徒を弾圧するために軍隊が動員される場合も稀ではなかった。ソロフキ修道院の場合がその一例である。白海のただ中、北緯六五度のあたりに浮かぶソロフキ島に二人の修道僧サヴァーチイとゲルマンが修道院を創建したのは一四二九年のことだった。この古刹からは名僧が輩出し、霊験あらたかな聖地として知られただけではない。製塩や漁業などの経済活動にも手をそめて、財力の上でもめざましい発展を遂げる。一七世紀の中葉には三五〇人の修道士をかかえ、労役に従事する俗人はその二倍を数えた。首都から遠くはなれ、伝統を誇るソロフキの僧たちは、ニコンの改革を「ラテン風の慣例、反キリストの徴」として拒否した。一六六八年に軍隊が派遣されてきたが、僧たちは軍隊を門内に入れなかった。中断をはさんで修道院の籠城は八年も続いた。

その間にヴォルガ川の流域でステンカ・ラージンに率いられる民衆暴動がおこった。カザーク(=コサック)であるラージンはソロフキ修道院を巡礼として訪ねたことがあり、暴動参加者の中には旧教徒が少なくなかったと言われる。正教会の分離は単に典礼改革の不承認にとどまらず、中央集権的傾向を強める国家権力機構への不服従、社会的不公正への抗議の様相を呈していたわけである。

一年ほどつづいたラージンの蜂起が鎮圧されたとき、残党の一部はソロフキ修道院に合流したという説がある。その真偽は定かではないが、ツァーリの政府は典礼改革を認めない僧たちの態度を皇帝への反逆とみなした。大砲などで武装した大軍が送られて、一六七六年にソロフキ修道院は陥落する。五〇〇人ほどの逆徒のうち生き残ったのは六〇人で、最後の段階で内通した数人を除く全員が残忍な方法で死罪に処せられた。

ソロフキ修道院の蜂起については数々の後日譚が伝えられている。その一つは、ソロフキ島から落ちのびた何人かの修道僧が日本に到達したという伝説である。一八世紀の末ごろ、旧教徒のあいだに「白水境」と呼ばれるユートピア伝説がひろまる。東方の大海に白

い水の流れる島々があり、そこではニコンの異端によって汚される以前の古いキリスト教信仰が純粋な形で保持されている。生き残ったソロフキの修道僧たちはそこに住んでいるというのである。

古儀式派はまもなく司祭の制度を認める容僧派と認めない無僧派に分かれるが、位階制度の不在は生活上古儀式派の信徒に多大な不便をもたらすことになる。司祭は正教徒の冠婚葬祭をはじめすべての教会の儀式を司ったが、無僧派ではナスターヴニクと呼ばれる長老がその役割を代行した。司祭の任命権をもつのは主教などの高位聖職者に限られていた。国家正教会から分かれて以後、古儀式派にはこの高位聖職者が不在——したがって司祭の供給がない、という状況が生じていたのである。

一六七六年のアレクセイ帝没後娘のソフィアが実権を握ると、古儀式派への迫害は一段と厳しさを増す。はじめはアヴァクームらを火刑に処し、なお古来の儀礼に固執する聖職者を逮捕投獄したが、次第に追及の手が俗人に延び、最後には古儀式派をかばい彼らに宿を提供する者にまで罪が及ぶとされた。このような重圧に対する対応にはさまざまな形態があった。第一は本心を偽って国家教会の正教徒をよそおうことである。このさい、教区司祭が教区民に買収されることが多かった。第二は森に隠れ住むことである。ロシアの国土は広大で人口がまばらなため、人目を避ける場所に事欠かなかった。二〇世紀の後半になってシベリアの僻地で初めて「発見」された古儀式派の集落や家族がいくつもあった。第三の方法は国外に逃亡することである。リトアニアやポーランドなどの国境を越えた者、さらには南の隣国であるトルコに領に属するバルカン半島に移住した人々が知られる。

三本指の十字を迫る権力への最も過激な抵抗は、集団的な自殺であった。ソロフキ修道院から逃げのび、北ロシアに潜んでいたイグナーチイという修道僧がいた。一六八七年イグナーチイは自分にしたがう農民たちはオネガ湖の小島に立てこもり、懲罰軍が押し寄せて支えきれなくなったとき、全員が礼拝堂に立てこもってかねて用意の藁に火を放って、全員が焼け死んだ。一八世紀の末までに、炎の中で自らの命を絶った古儀式派の数は一万人を超えたという。

ソフィアを倒して帝位に就いたピョートルは現実主義的な態度を取り、古儀式派の人頭税を国教徒の二倍として、特別な衣服を着用させた。また国家に対して何らかの奉仕を行なう者にはそれを条件に集団で居住する許可を与えた。

女帝エカテリナ二世の時代には、モスクワのはずれの二カ所の墓地に古儀式派の別々のセクトに固まって共同体を維持することを許した。それでも、一九〇六年の国家基本法（憲法）で良心の自由が認められるまで、古儀式派はロシア国内で教会をもつことが許されなかったのである。正教会が古儀式派への「呪詛」を解くのは一九七一年のことである。つまり、異端と見ることをやめたのである。

3. 白水境伝説の成立

白水境に関するユートピア伝説がはじめて公式の記録に残ったのは、一八〇六年のことである。この年、シベリアのトムスク県の百姓ボブイリョフなる人物がペテルブルグの内務省に出頭して次のような申し立てをした。南アルタイのプフタルマ川（大河オビ川の支流）の上流のあたりで中国との国境を越え、この国を横断すれば海のかなたにオポーニア（＝ヤポーニア、日本がなまってそう呼ばれたらしい）という島がある。そのオポーニアに古儀式派のロシア人が住んでいる。彼らはソロフキ修道院の蜂起のさいにロシアから逃亡した者たちの子孫で、今なお古いしきたりにしたがって暮らしている。最近ツァーリが古儀式派に教会再建を許すという話が伝わったので、皇帝の臣民として帰服することを願っている。彼らは国境のかなたに3カ所に分かれて住んでいる云々。ボブイリョフは自分がヴェロヴォージェエまで案内してもいいと申し出たが、内務省は彼に一五〇ルーブルの大金を褒美として与えただけで、シベリア総督の許へ改めて出頭するよう命じたが、この男は役人の前に二度と姿を現さなかった。ヴェロヴォージェエの所在をもっと明確に示す手書きの文書が残っている。「オポーニアへの旅案内」と題された写本がそれで、確実に伝来したものが一九世紀後半の時点で四点存在した。内務省に古儀式派担当の官吏として勤務し、ヴォルガ川中流のザヴォールジエの古儀式派の生活を題材としてすぐれた長編小説『森の中』『山の上』を書いたパーヴェル・メーリニコフ（一八一八～一八八三、筆名アンドレイ・ペチェルスキー）が長大な論文『容僧派旧教徒の歴史』の中で引用しているものである。その内容は以下のとおりである。

日本国への旅案内、すなわち経路。

モスクワより、カザン、エカテリンブルグ、チュメーニ、カメノゴルスク、イズベンスクを経て、カトゥーニ川をさかのぼってクラスノヤルスクのウスチュバ村へ。この村で旅人宿のピョートル・キリーロフを訪ねよ。近くにあまたの秘密の洞窟があり、そこからいくばくも無いところに雪をいただく山々が三百露里（一露里＝約一キロメートル）にわたって連なり、この山々の雪は融けることがない。これらの山々の背後にウミメンスク村があり、そこに小礼拝堂があつて、苦行僧ヨシフが守っている。そこより中国に通じる道があり、徒歩で四四日行くと、グバニを経て、やがて日本国に至る。

その地の住民は大洋に囲まれたヴェロヴォージェエと呼ばれるところに住んでいる。住民たちは七〇あまりの島々に分かれて住み、その島のいくつかは五百露里も隔たつていて、小なる島々にいたっては数えることも不可能である。

彼らがここに住んでいることは、宗教会議にもとづく聖使徒教会の古き信仰を守るキリストのまねび人たちに周知のことである。余がこの事実を断言するのは、余すな

わち罪障ふかき修道僧マルク自身、二人の修道僧とともにここを訪れたからである。東方の国々において、彼らは大いなる熱意と努力を払って、魂の救済に欠かせぬ古き信仰を守る正教の牧者たちをさがし求めてきたが、神のお助けによってシリア派の一七九の教会を見出した。彼らはアンチオキアで立てられた正教の総主教と四人の府主教をいただいている。一方、四〇にのぼるロシア人の教会もまたシリアで立てられた一人の府主教と主教たちをいただいている。ローマの異端どもの迫害をのがれて、多くの人々が北氷洋を経由する海路並びに陸路でこの地に赴いた。[神はこの地を充たされている。ロシア人もまたモスクワ総主教ニコンが古き信仰を裏切ったとき、ソロフキ修道院はじめ各地を逃げ出して、あらゆる身分の者が、北氷洋を船で渡り、他の者はロシアから陸路で、この地を充たすためにやってきた。一別の写本より] 疑いを抱く者があれば、余は神をわれらの証人に立てよう。キリストの再臨まで血汐を流さぬ生贄がささげられるであろう。

この地ではロシアから来る者は最高の格式をもって迎えられる。すなわちここにどまることを望む者は、三たび浸水して完全な洗礼を受ける。余の伴侶たりし二人の修道僧はここに骨を埋めることに同意し、聖なる洗礼を受けた。彼らの言うには、「御身らはみなアンチキリストのさまざまな大異端によってけがれている。『けがれたる人々の群れより出でよ。女を追い求める蛇に触るるなかれ、地の裂け目にかくれたる女をとらえることはかなわぬ故なり』と書かれているとおりでである。」

この地には盗み、騙り、その他掟にそむく行為はない。俗権による裁判は行なわれず、教会当局がもろもろの民とあらゆる人々を治めている。そこには木々は最も高い木 [山々一別の写本より] と同じ高さである。冬季には異常な寒気が襲い、大地に亀裂が生ずる。かなりの地震をともなう轟音もよく起こる。ありとあらゆる大地の実りもある。ぶどうや米も育つ。「スウェーデン国への旅案内」で語られているように、彼らのもとには金と銀が無限にあり、宝石や高価な真珠もきわめて多い。彼ら日本人は自国に何人も入れず、どことも戦争を行なわない。彼らの国は遠く離れているからである。

中国*にはどこにも類がないような驚くべき町がある。彼らの第一の首都はカバンである。[山々一別の写本より] ほかに多くの町々があり、人々はむつまじく暮らしている。このヴェロヴォージエの地の到達できるのは、後へは引かぬ炎のごとき熱烈な覚悟を固めた者のみである。神はかかる者こそ真に導きたもうのである。アーメン。(中村、1997年、107-110)

本稿を執筆している中村もかつてモスクワの某コレクターの許でこの手書き本の一異本ともいべき写本を見る機会があったが、文字はいわゆる金釘流で語や句の切れ目がなく、きわめて読みにくい印象だった。右の手書き本を紹介しているメーリニコフによれ

ば、当地を訪ねたと称する人物の名前がマルクとなっているものと、ミハイルと称しているものの二種類があるという。グバニというのはゴビの誤りか、というのもメーリニコフの注。

この文書には、ユートピアである白水境ではニコンの改革以前の信仰が守られていて、総主教を頂点とする聖職者の位階制度完備していることが強調されている。次に各種の犯罪がなく、外国との戦争も行わないから、軍隊に兵士として徴集される恐れもない。しかも大地の実りが豊かであるという。ニコンの改革を強制され、なおかつ司祭の不在になやむ古儀式派ロシア人にとっては理想的なユートピアであると思われたに違いない。しかし、金や銀が無尽蔵であるという点は、不審である。元来、古儀式派は世俗の富を追い求める人々ではなかったからである。

マルクあるいはミハイルと称する人物は聖職者などではなく、またむしろ古儀式派の正教徒でもなく、たんなるホラ話を語り歩いていた放浪者で古儀式派にかかわりなく、さまざまな人々から金品を騙り取っていたごろつきであろう、と考えられている。

ただ実際に白い水しぶきをあげて流れるブフタルマ川の流域に住みついたロシア人があり、かれらが古儀式派だったことは事実だった。アルタイ山地が「石の山」と呼ばれていたところから、彼らは「石の民」と名付けられた。帝政末期の有名な百科事典『ブロックハウス＝エフロン』にこの見出しが立っている。それによると、「石の民」はいかなる権力の支配も受けず、家畜を牧し、農業を営み、古儀式派の掟にしたがっていかなる不自由を知らずに暮らしている。彼らは合議制の自治をひいている。裁判での最も重い刑は集落からの追放で、罪人は筏に乗せられてブフタルマ川を流されるのである。「石の民」の噂は急速に広まり、シベリアやロシアの各地から逃亡農奴や脱走兵が国境守備隊の目をくらまして流入しはじめた。一七八八年にはこの川の上流にすでに百人以上のロシア人が住み付いてついていることを、守備隊駐屯地カメノゴールスクから派遣された部隊が発見している。

一七九一年に「石の民」がロシア政府に帰順したのは、ブフタルマの谷に凶作が近づき、ロシア本土との交易が必要になったことと、先住民キルギス人からの圧迫が強まったためである。しかし国家の正教会に転向することは拒否したので、女帝エカテリーナ二世は彼らに対して人頭税を課さず、異民族なみに毛皮によって貢租を払うように命じた。こうして「石の民」は徴兵と納税の義務を免れ、ある程度の自治が保証された。

話は一足飛びに二〇世紀に飛ぶが、豊穡の地アルタイへのあこがれが現在もなおロシア人のあいだに生きているらしいことは、ソルジェニーツインの『収容所群島』の次のような記述からうかがうことができる。

どういふわけか、監房ではアルタイ地方に関する伝説がもてはやされていた。そこへ行ったことのあるわずかな人々、いや一度も行ったことのない人々が、監房の仲間た

ちに美しい夢を語って聞かせたのだ——アルタイは素晴らしい土地だ！そこにはシベリアのような広い土地と温和な気候がある。穀物の実る岸边にはさまれて、密の川が流れている。草原と山々羊の群れ野鳥、魚、人口稠密な村々……（ソルジェニーツィン（木村浩訳）、1974年、第1巻255頁）

作者はこの個所について「アルタイ地方についての囚人たちの夢は、古くからの農民の夢の延長ではなかろうか」と注釈をつけている。

4. 日本を訪ねた人々

北海道の渡島教育会が編纂した『函館支庁管内町村誌』という書物がある。北海道の開道五〇年記念博覧会に出品するため大正六年（一九一七年）に執筆され、一冊にまとめられたのはその翌年だったらしいが、結局博覧会には間に合わず、仮製本のまま札幌の北海道立文書館に収蔵されている。手書きの書物で全五冊の大部のものであるが、その第一章銭亀沢村についての記述の末尾に「露国人の農業」と題して次のような一節が含まれている。（仮名は片仮名が用いられているが、便宜的に平仮名に直して引用する。）

本村大字志海苔村大字笹流に浦塩に本籍を置ける露国人エフ・デ・サヴェーリエフ、同人妻クセニヤ及び長女、同親戚なるアキム、パウロウイチ・ワシレフ、同人妻フェクターなる者、大正三年一〇月頃より移住しきたり、牧畜を業とし傍ら養鶏、養蜂をなし、着実に経営しつつあり。同人らはもと函館新川町に移りしものにて、該地は函館区の人、沢克己¹の所有地なり。（『函館支庁管内町村誌』、1971年、39頁）

この記事ではロシア人の数はサヴェーリエフ家三人、ワシレフ家二人で、合計五人にしかならないが、同じ『町村誌』の別表に掲げられている数字によれば、ロシア人男三人、女四人で、合計七人となっている。つまり、エフ（おそらくフョードル）とクセニアのサヴェーリエフ夫妻と長女、ならびにアキムとフョークラのワシリーエフ夫妻のほか、男子と女子がもう一人ずつ暮らしていたのである。

興味を惹かれるのは、本書の後編の部に笹流のロシア人家屋らしい人家数戸を遠望する手札型の写真が一枚添付されていることである。この写真は画面が暗くて不鮮明であるが、木造で平屋建てらしい家屋はいずれも屋根はゆるやかな勾配をもっており、少なくとも二戸にはブリキ製の煙突が立っている。煙突のないのは畜舎かもしれない。どの家にも窓は一つも見えない。やや低めの柵が全部の家屋を取り囲んでいるのは牛をここに放して

1 沢克己という人物は函館の漁業家の一人。沿海州でサケマス漁業に従事しているうちに、古儀式派のロシア人と知己になったものと推測される。

いたためであろう。ただし画面には動物の姿も人の影もない。

さて『函館管内町村誌』が編まれてから五年後、大正一一年五月には笹流に住むロシア人の数は七人から一九人に増えていた。函館毎日新聞社の同年五月二八日の記事が「アケム爺さん」としてワシーリエフのことを紹介しながら、その人数を挙げているのである。記事の中で「本国の騒擾」を逃れてきた人々がいるというのは、もちろん一九一七年のロシア革命をさしているサヴェーリエフとワシーリエフ夫妻をはじめとする第一次の入植は革命以前だったのである。

函館毎日の記者の観察によると、ワシーリエフの家の内部はごく質素であるが、一隅の祭壇に大きな書物が六冊も置かれていた（おそらく聖書か祈禱書であろう。）それは毎土曜日の夜から日曜日にかけて、あるいは祭日の折に集落の全員が集まってミサを行なうためである、と説明された。ここに笹流のロシア人が一種の宗教上の共同体をなしていたことが暗示されている。この点をもっと明確に述べているのが同じ新聞の大正一四年三月二七日付の記事である。長さをいとわず全文を引用したい。仮名遣い、句読点は現代風に変更した。カッコ内は筆者の注釈である。

「神話にありそうな白鬚の露人／団助澤の露人の群れに一人気高く信仰に生きて」（見出し）

上湯川のトラピスチン修道院から約四、五町行ったところに、俗称団助澤笹流という岡続きの原野がある。銭亀沢村管内になっているが、ここにいつとはなしに露人の群れが渡来して小さい家屋を建て付近の土地を耕し、あるいは馬車追い（運送屋）となって函館市中まで労働に来るのはよく人の知る所であるが、かれらは何ゆえに故国からはなれたこの荒漠たる平野にさびしい生活を求めたか。

露人の群れの中に白鬚の長い長老格の爺がいる。ワシーリエフといい、自分の年齢を知らない。仲間の露人の話では百歳を超えたらうといわれている。このワシーリエフ老がそもそも移住の先駆者である。彼の生まれはシベリアの寒村で、父祖伝来の旧教信者であったが、新教の圧迫によって信仰の苦痛を感じ、宗教の自由の国を求めたところ、たまたま東の国にベルスセイタがあると聞き、はるばる夢のような国を求めて着いたのがこの函館であった。

当時函館領事であったトライショルト（正しくはトラウトショリト）氏は不思議な老翁がベルスセイタ「広い世界」はどこかと謎のごとき問いにいささか当惑したが、あるいは当別のトラピストを望んできたのではと感じ、当別のフランス人某氏に彼を託したが、しばらくして「広い世界」はここだと不思議な謎の望みは解けたが、それは当別と反対の岡の宇賀の高原であった。

最初函館の土地を踏んだ時、一抱えの瓶を大切にもっていたが、これは彼の飲料が入っていたのであった。ほどなく飲料の欠乏を感じ、しきりに飲料水を探したのが松

倉川であった。彼は自然の水でなければ口にしない。明治四三年ころ新川の向こうの砂地に八〇円で一戸を建て、ここでしばらく黙々と神の信仰に勤めていたこともあった。団助澤に移ってからは同じ旧教信者の家族を呼び寄せ、ここで水入らずの信仰の地をつくったが、それは老爺の徒勞であった。

天然の川の水をくみ、自然の岩塩を求め、湯にも入らなかった旧教徒の群れは、今は酒を飲み、タバコを喫し、湯川あたりの料理屋で一遊を試みるは平然となったが、ワシーリエフ老のみは汚れゆく彼らを厳しい目で見返りながら、相変わらず黙々と旧教の信仰からはなれぬ。

ワシーリエフは歳を知らず、正月ももちろんない。病気は神の罰であるとして、薬は飲まない。彼の先妻が数年前かの岡で病死したとき、勝手に穴を掘って埋めて、騒ぎを起こしたこともある。今日先妻の妹婆さんとともに浮世を外に信仰に生きている。（『函館毎日新聞』、1926年3月27日）

この文章では、「ベルスセイタ」の語が判然としない。上述の「白水境」にあたるヴェロヴォージエの訛った語形と思われる。水のようなものについても、流れる水でなければ飲まないこと（都市の水道水は忌避される）、酒やたばこはもとよりタブー、食事も旧教徒同士とはテーブルをともしない、食器も仲間以外とは共有しない、等々旧教徒の間にはきびしい掟が守られていた。この記事からは、彼らを取り巻く周囲の影響を受けて旧教徒の一部が酒やたばこの誘惑に屈してゆく姿が描かれているが、それが真実であったとは信じがたい。函館には古儀式派ではない普通の白系ロシア人が多く住んでいた（北洋漁業の関係で数百人が居住したらしい）、新聞記者の誤認や混同があったかもしれない。

新聞とは別の角度からの古儀式派共同体について暗い消息を伝える資料が外交史料館に保存されている。北海道庁外事課が大正一五年中の外事警察状況として内務省に提出した報告がそれである。「白系旧露国人」の動静の末尾に書き添えられたものである。「尚、従来函館市外銭亀沢には「スタラヴェール」を奉ずる白系旧露国人の特殊団体の農業に従事する団体のありしが、生活困窮その他のため漸次北米に移住し、目下二戸九名現存するに過ぎず。」

白水境のユートピア伝説を信じて日本へやってきたもう一組のロシア人がいた。彼らはウラルに住むカザークの古儀式派ロシア人で、悪名高いアルカージイ（彼は白水境で府主教に叙任されたと自称していた）のホラ話に魅せられて、黒海に臨むオデッサからの船旅でユートピア探しに長崎までやってきたのである。グリゴリー・ホフロフという人物がリーダーで、旅行費用として仲間のカザークたちが二千五百ループリを拠金して三人の先達を極東へ送ったのである。失敗例の多いアルタイ経由を取らず、海路を選択したのは賢明だった。幸いにもホフロフは日記をつけていた。その日記をナロードニキ派の著名な作家であるコロレンコが手に入れてペテルブルグで出版されていた『地理学協会』の紀要に

発表した。ホフロフには一種の文才があって、そのヴェロヴォージェ紀行は興味深く読まれる。イスタンブールとパレスチナで彼らは抜け目なく聖地巡礼を果たした。聖地に関して披瀝される聖書についての博識ぶりを讀むと、二千年前の故事に詳しい人物がなゼアルカージイのような詐欺師の口車に乗せられたのか不思議に思われる。正しい信仰への希求がそれほど強かったのである。東シナ海を通過したとき海水が白濁したので、彼らは「すわ白水境か」と色めき立つ。しかしそれは長江の水が流れ入ったに過ぎないことがわかる。カザークたちが長崎に着いたのは明治三一年八月一九日のことである。ここでも彼らはニコライという正教会の宣教師が日本で成功を収めていることを聞かされて、失望する。ユートピア探索の夢破れて、彼らはウラジヴォストークを経て陸路でウラルに戻った。シベリア鉄道が営業を始める直前のことである。

参考文献

- ソルジェニーツイン（木村浩訳）、1974年、『収容所群島』、新潮社。
中村喜和他、1993年、『<百章>試訳（2）』一橋大学研究年報、第30巻、3-97頁。
中村喜和、1997年、『聖なるロシアを求めて：旧教徒のユートピア伝説』、平凡社。
中村喜和、2003年、『聖なるロシアの流浪』、平凡社。
『函館市庁管内町村誌』（手写本）、1917年、道立図書館蔵（札幌市）。
К.В.Чистов, «Русская народная утопия». С.-Пб., 2003.
Д.А.Баранов и др., «В поисках беловодья», С.-Пб., 2010.

キーワード 中世ロシア、古儀式派、ユートピア、白水境、日本、アヴァクーム、典礼改革、北海道、ソルジェニーツイン、移住

(NAKAMURA Yoshikazu)

